

音楽科

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062422

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



6の3 音楽科学習指導案

場 所 第一音楽室

指導者 徳田 典子

題材名 豊かな表現を求めて 「 L-O-V-E 」 ナット・キング・コール

(1) めざすコミュニケーションの姿

アレンジしたドラム演奏を互いに聴き合いながら、それぞれのグループが表したい表現が演奏に生かされているかを伝え合う姿

(2) 本時のねらい

ドラムセットを使って、グループの思いや意図にふさわしい表現の工夫をすることができる。
(思考力、判断力、表現力等)

(3) 学習の展開

時	学習のながれ	・手だて ◎評価 ★めざすコミュニケーションの姿にせまるための手だて
10	1. 前時までの表現を想起する ・これまで考えてきたグループの演奏表現を確かめよう。 ＜アレンジしたドラム演奏から 各グループの思いや意図を解き明かそう＞	・各グループで考えた表現を確かめるために楽曲のCDをかけて表現を想起させる。
20	2. アレンジしたドラム演奏を聴き合う ・ライドやクラッシュの使い分けが上手くて、演奏がスッキリとした印象をもったよ。 ・ハイハットのオープンやクローズの使い方がカッコイイ。とてもノリがいいな。 ・フィールインの時のドラムの選び方が気分を高めるね。この演奏は〇グループかな？	・アレンジした演奏から各グループのテーマタイトルを予想させるために、表現の特徴を示し演奏させる。 ・各グループのテーマタイトルを予想させるために、聴き取った表現や感じとったことをもとに、グループや全体で感想の交流をする。
10	3. 次時の課題を確認する ・Cグループは、クラッシュの演奏の仕方の工夫をして、さらにさわやかな演奏にしたいな。 ・Aグループはライドやクラッシュの音色の違いを丁寧に表現したいな。 演奏表現を聴いてテーマタイトルをあきらかにする試みは、とても難しかったよ。どのような表現にしたら、テーマタイトルがイメージできる演奏になるかをよく話し合っ、表現を考えていきたいね。 ・次は動画をじっくり見てから表現を組み立てたいな。	★各グループの表現をより客観的に把握するために、演奏の動画を撮影させる。また、今後の表現の変容に役立てるために話し合いの内容は記述させ、グループファイルに蓄積させる。 ◎グループのテーマタイトルにふさわしい表現を工夫し、どのように演奏したらよいかについて思いや意図をもっている。 (演奏の聴取, 発言の内容, 行動の観察)

【実践のウリ】

この題材では、ドラムセットを使ってリズムパートのアレンジを実施した。楽曲は、鑑賞用教材として収録されていたナット・キング・コールの英語版を使用し、ここではグループ(8～9人)を主体として協働学習を設定した。6年生がアレンジして奏でるスウィングジャズ「L-O-V-E」は、柔軟な発想が最大限に発揮され、純粹でいきいきとしたドラム演奏となった。

【実践例】

本実践では、初めにドラムセットを使って、スウィングジャズの特徴を表現するための技能を習得させた。その上で、子供は教科書に提示された打楽器パートを参考にし、ドラムセットを使う打楽器パートのアレンジをした。子供は友達がアレンジしたドラム演奏を聴き合ったことで、表現に対する発想を広げることが出来た。グループ学習では、これまでに既習した技能や表現の発想などを生かし、グループとしてのドラム演奏をまとめた。また、本時ではそれぞれのグループの表現内容がより伝わるように「〇〇 L-O-V-E」というオリジナルのタイトルを設定させ、ドラム演奏の鑑賞を通して、タイトルに込めた演奏表現を解き明かすという展開を実施した。

【成果】

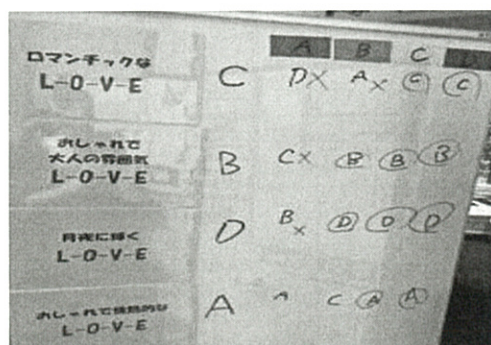
成果としては、一人一人の子供が自分なりの表現でスウィングジャズのドラム演奏を楽しんでいた。また、自分の考えた表現をドラムセットで演奏する試みは、協働学習において話し合いの土台が揃うことにもつながった。

本時では、各グループの思いや意図を解き明かすために、工夫した器楽表現を聴き取り、自分の感じたことなどを積極的に伝え合うことで活発な議論となった。各グループのオリジナルタイトルは、グループの表現したい思いが表れていることもあり、より愛着をもった表現の工夫となった。スウィングジャズの楽曲のもつグルーブ感やスウィング感には、楽しさや体を動かしたくなる感覚があるということがより実感させられた実践となった。

【課題】

器楽学習では、いかに演奏量を与えて、個々の子供に技能を習得させるかが肝心だと考える。そのためには、場の設定やタイムマネジメントなどを細やかに考え、学習を保障することが大事と感じた。また、コロナ禍という制限もあり、教科書に提示されている本教材の器楽合奏をそのまま実施することは難しいと判断し、今回は打楽器パートに着目した学習構成とした。今後も様々な状況に応じて、新たな学習展開を構成する柔軟性が必要だと感じた。さらに、本実践では、自分のグループの表現を子供のタブレットで録画し、工夫した表現を客観的に見つめたことで、表現の再構成をする姿が多く見られた。今後もより豊かな表現を目指すために、機器使用のあり方を考えていきたい。

【資料】



資料1 演奏からタイトルを予想した板書



資料2 アレンジした表現を演奏する姿



3の3 音楽科学習指導案

場 所 第2音楽室

指導者 本多 春奈

題材名 曲の感じをとらえて表現しよう

雪のおどり 油井 圭三 作詞/チェコ・スロバキア民謡

(1) めざすコミュニケーションの姿

雪のイメージや雪を表す音について、それぞれのグループで多様な考えを出し合う姿

(2) 本時のねらい

雪を表す音をグループで試行錯誤しながらつくることができる。

(思考力、判断力、表現力等)

(3) 学習の展開

時	学習のながれ	・手だて ◎評価 ★めざすコミュニケーションの姿こせまるための手だて
5	1. 前時をふりかえり 課題をつかむ ○前時はどんなことを話し合ったかな。 ・自分たちのグループで話し合って、雪のイメージを考えたよ。 ・考えた雪のイメージを音で表すんだね。 ＜「〇〇な雪」を音で表すと？＞	・雪のイメージを広げるために、様々な雪の写真を提示する。
15	2. グループで雪の音をつくる ○どんな音で雪の様子を表すことができるかな。 ・二つの楽器で音づくりをするんだね。 ・雪は静かに降るから小さい音で鳴らしてみよう。雪が降るイメージにぴったりだ。 ・キラキラ光っている様子はトライアングルを細かく鳴らしたらどうかな。	・楽器を限定することで、工夫の観点を明確にする。(鈴・トライアングル) ・様々な音に気付かせるために、工夫した音の出し方を全体に広げる。 ★思いを表出させ、交流を深めるために、音を視覚化したワークシートを用いる。
15	3. 全体交流をする ○どんな雪の音ができただかな。 ・鈴を細かく鳴らして、粉雪がサラサラ舞っている様子を表したよ。 ・小さい音から大きな音に変えていくことで、雪がどんどん降ってくる様子を表したよ。	◎雪を表す音を試行錯誤しながらついている。(発言・ワークシート)
5	4. 本時をまとめ、次時の課題につなげる ○どのように楽器を鳴らすと、自分たちのイメージぴったりの雪の音になるのかな。 鳴らし方や強弱を工夫することで、イメージにぴったりの雪の音ができるよ。 ○次時は、つくった音の組み合わせを考えて、「雪のおどり」にぴったりな前奏をつくるよ。	★他グループの工夫のよさを自分たちの音楽に生かすために、グループ→全体交流→グループの順に交流を進める。 ・雪のイメージと音をつなげて考えるよう声かけをすることで、各グループの工夫に気付くことができるようにする。 ・次時の学習を伝えることで、音楽づくりへの期待をもたせる。

【実践のウリ】

本題材では、歌唱と音楽づくりによる題材構成を考えた。「雪のおどり」は「こんこん」や「ずんずん」などのわかりやすい言葉で雪が降る様子を表しており、曲のイメージをもちやすい楽曲である。また、「雪のおどり」がもっと雪のイメージが伝わる曲にするためにはどうすればいいかな、という課題を提示することで、イメージにぴったりの音をつくる学習に自然につなげていくことができた。

【実践例】

音楽づくりの導入は、雪のイメージをもつことから始めた。まず個人で雪のイメージについて考えた後、グループ交流をすることで雪のイメージをさらに広げられるようにした。また、雪の画像を提示することで、雪のイメージをもつことが難しい子供の手助けとなるようにした。

雪の音は、鈴とトライアングルの2種類の楽器でつくることとした。楽器を限定することで楽器の種類にとらわれることなく、子供の思考を音色に焦点化することができた。また、鈴とトライアングルそれぞれに音の高さや響きの違うものを用意することで、2種類の楽器だけでも音づくりの幅が広がり、様々な雪の音をつくることができた。子供はイメージによって2種類の楽器を使い分けたり、音を重ねたりし、様々な鳴らし方を試しながら音をつくることができた。グループで音づくりを進めた後には全体交流の時間をもった。全体で様々な音を聴くことによって各グループの工夫に気付くことができ、その後のグループ活動でも他のグループの工夫を生かす様子が見られた。

【成果】

グループで話し合い、奏法を工夫しながら音づくりをしたことで多くの気付きがあり、音をただ鳴らすだけではなく音楽の仕組み（強弱、音の重なりなど）を活用しながら音づくりをすることができた。また、グループ→全体交流→グループの順に活動を進めることで他グループの様々な工夫に気付くことができ、音づくりの幅が広がっていった。

【課題】

ワークシートが分かりにくく、音を図に表すことが難しかった。イメージを分かりやすく表すことができるように、ワークシートの構成を見直す必要がある。音を聴き合いながら音楽づくりをするため、一人一人の距離が近くなった。密集を避けながらのコミュニケーションが難しく、場の設定や活動の内容を工夫する必要がある。全体で動いていたときに比べ、ペアで見合うときには動きが小さくなってしまった。ペアで見合うときでも大げさな動きを見せたいと思わせる手だてが必要だった。

【資料】



資料1 様々な奏法を試しながら音をつくる様子



資料2 種類のトライアングルの音を聴き合う様子

